

研究 成 果 報 告 書

2021 年 07 月 30 日

1. 所属・職・氏名 等

教養学部 学校教育学科 准教授 瓦林亜希子

2. 研究課題（テーマ）名

フランスと日本における学習者主体の教育の重要性について、その実践の歴史と思想を通して理解するためのフランス人教育学研究者の日本への招聘と、両国の学生をも含めた日仏間の言語・文化・教育交流による異文化・多様性理解の実践的・体験的な促進（国際共同研究に関する研究領域）

3. 研究期間

2019 年年度から 2020 年度までの 2 年間

4. 利用した研究費の種類及び金額

重点領域研究費（40 万円：2019 年度のみ、2020 年度分は未使用のため返還）

5. 研究の概要

<2019 年度>

初年度は、以下の2点のテーマを柱として、仏ロレーヌ大学の教育学研究者であるアンリ＝ルイ・ゴ先生とフレデリック＝マリー・プロ先生を、都留文科大学に招聘した。

- ① フランスと日本における学習者主体の教育の重要性をテーマに都留文科大学にて講演をして頂き、その実践の歴史と思想を通して、子ども中心の教育の真髄について、教員と学生がさらなる見識を深めるため。
- ② 学生・教員両者の間での日仏の言語・文化・教育交流を進めていくことで、異文化・多様性の実際的な理解をさらに促すため。

実際には、①の講演の実現だけでなく、次項目の「研究成果等」で詳しく示すように、学校教育学科の廣田ゼミ・瓦林ゼミへのお二人の参加や、教職センターでの教職カフェへの参加など、②で掲げたお二人と学生たちとの交流も、様々な形で行うことができた。

講演会は、2020 年 1 月 30 日木曜 16 時半より、本学 2 号館 2101 教室にて行われた。テーマを「子ども主体の教育：フレネ教育の真髄とは？」とし、第一部は「フレネ教育の誕生」と題し、フレネ教育がフランスにおいてどのようにして生まれたのかについてゴ先生が紹介し、第二部は「フレネ学校における現在の教育実践」とし、今現在のフレネ学校が如何に機能しているかについて、プロ先生が説明をされた。お二人のご要望により、講演の後に出来るだけ多くの時間を質疑応答と議論に充てたいとのことで、後半は、会場一杯に集まった 200 人以上の学生・教員から質問と感想を募った。学生からは多くの質問や意見が出され、お二人もそれぞれに真摯にお答え下さり、充実した議論と意見交流が行われた。この

講演会の詳しい様子は、『都留文科大学報 142 号』にも紹介され、大成功のうちに終えることができた。

<2020 年度>

研究2年目となる 2020 年度は、フランス人日本研究者で、特に日仏の教育方法や制度の比較研究を主に行なっている、トゥールーズ大学文学部のクリスチャン・ギャラン教授を招聘する予定を立て、ご本人にも 2020 年 10 月か 11 月ごろということで、承諾を頂いていた。ギャラン教授の専門は明治期以降から現代までの日本の読み方教育の歴史・その方法についてである。加えて、日仏両国の学習者主体の教育や、日本の歴代文部省/文科省が行った教科書の改訂の歴史や、教育制度改革についても造詣が深いことから、仏人研究者からの独自の視点を持って、日本の教育や文化についての、深い考察を与えてくれる講演をして頂くことを想定していた。こうしたギャラン教授の講演内容は、学校教育学科だけでなく、国文科や比較文化学科、国際教育学科等の他学科の学生たちにとっても、意義のあるものになるのではないかと考えていたからである。

しかしながら、2020 年 2 月末からの日本における新型コロナウイルス感染症拡大による緊急事態宣言発令に始まり、その後の世界的パンデミックの影響で国際的な往来が不可能になってしまったため、この計画を断念せざるを得なかった。2021 年度には、新型コロナウイルス感染者数やワクチン接種の状況の改善次第ではあるが、瓦林の科研費等を使い、可能であれば安全を確保できる状況を担保した上で、ギャラン教授を日本に招聘できる道を模索したいと考えている。

6. 研究成果等

<2019 年度>

ゴ先生とプロ先生の招聘による本学の研究者・学生等への還元実績と成果

① 今後の日仏研究者間の教育研究交流にあつての情報交換

ア) 研究領域や方法、前提となる情報の交流:

日仏の学校教育制度、教育課程、教員の勤務状況に関わる情報交換を、お二人と本学の複数の教員間で行った。議論の中で、特にフランスにおける教員の教育実践に対する自由度が非常に高いことが印象的であった。また、算数教育の日仏の教育内容や教育課程の大きな違いも興味深かった(フランスは計算よりも文章題が基本であることなど)。

イ) 今後の教育研究交流の運営について:

研究者交流だけではなく、学生・院生の教育と不可分に行うことを確認した。今後のフランス教育の視察研修の計画について具体的に話し合った。(フレネ教育の現場だけでなく、一般的な公立学校の教育も見学できるように願います)

② 学部・大学院教育への還元

ア) 学科講演会「子ども主体の教育・フレネ教育の真髄とは？」開催:

お二人による講演会は、2020 年 1 月 30 日木曜日 16 時半より、本学 2 号館 2101 教室にて行われた。ゴ先生もプロ先生も、フランスで 1920 年代に誕生した子ども主体の自由教育「フレネ教育」の研究者でおられる。戦前という厳しい時代にありながら、子どもに自由に表現させることを土台に、学習者中心の教育方法を先駆的に創造したセレスタン・フレネ(1896-1966)。このフレネ自身が創設した森に囲まれた小さな学校が、今もなお公立学校として南仏の街ヴァンスに存在してい

る。そのフレネ学校における過去と現代の教育実践を研究しているお二人が、フレネ教育の持つ子ども主体の教育のエッセンスについて、お話しして下さった。前半のフレネ教育の歴史については、ゴ先生が入手された非常に貴重な戦前・戦後直後当時のフレネの写真なども交えながら、また、後半の現在のフレネ学校における教育実践に関しては、プロ先生ご自身が記録された実際のビデオ映像を介して、視覚的にも非常に分かりやすい説明をして下さったことから、フレネ教育をよく知らない初心者にも、理解しやすい内容になったのではないかと思う。

お二人としては、フレネ教育に対する日本の学生の関心を知りたいとの意図があり、あえて質疑応答と討論の時間を多めにとった。「フランスの公立学校では図工の時間がないとのことだが、なぜ敢えてフレネ学校では美術教育を行なっているのか？その特徴は？」「フレネ学校では文章を書くという自己表現のための学びをまずは大切にされているが、具体的にはどのような教育を行なっているのか？」「現代では学校教育に意味を見出せない子どもも多いが、フレネ教育における学校で学ぶ意義とは？」「子どもの学びを多方面から支えるフレネ教師の仕事は一般的な学校の教師よりも負担が大きいのでは？」など、学生から多くの質問や意見が出され、お二人もそれぞれに真摯にお答え下さり、充実した議論と意見交流が行われた。

参加者は合計 250 人前後。2号館階段教室が一杯となり、立ち見も出た。終了後も質問が続き、場所を廣田研究室に移して、日仏の教育の違いやその実態について、お二人を交えて講演後も2時間近く続けられた。最後まで残った学生は 15 人ほどであったが、学生の子ども中心の教育実践に対する関心の高さを実感した。

イ) 瓦林・廣田ゼミの拡大合同ゼミの開催:

日仏の子ども主体の教育に関わる専門的な知見について、お二人の先生の説明や学生からの質問をもとにした議論が主となった。実践系の学生だけでなく表現系の学生(音楽・美術の学生が多数)、噂を聞きつけた他学科の学生や院生も参加(合計約 30 人)。フランス語圏に留学経験のある十川先生、山口先生の参加とご協力も頂いて運営。

ウ) 教職カフェへのお二人の特別参加:

全学科の学生を対象に参加は合計 25 人。この企画は通常の教職カフェのやり方を踏襲したため、フレネ教育の学習と言うよりも、日仏の教育・教員養成の実態やその違いについて語り合う交流となった。教職センターの山崎、宮下、泉先生も参加。

日仏間の研究・学生交流の実験的実施(仏の公教育及びフレネ学校の見学研修旅行実験版)

2020 年 2 月、コロナ騒ぎを何とかすり抜けて、都留に招聘をさせて頂いた仏ロレーヌ大学教育学部アンリ＝ルイ・ゴ准教授とフレデリック・プロ准教授のご協力のもと、ナンシー市内の公立学校(幼・小・中学校)とヴァンス市のフレネ学校を見学し、フランスの教育現場の今とフレネ教育の可能性について学ぶ研修旅行を、まずはゼミ学生ら 12 名を連れて実験的に行うために、フランスを訪問した。(引率教員は瓦林と十川先生の2名)

ナンシーでは、残念ながら市内のコロナ感染状況拡大により、当初計画していた市内の公立学校への見学は、直前に中止になってしまった。その代わりに、フランス教育と制度の歴史についてと、訪問予定のヴァンス市にあるフレネ学校の教育実践に対する分析についての講義を、ゴ先生とプロ先生がかなり詳しくして下さい。これにより、フランスの教育制度の今と昔とフレネ教育の現状に関して、さらに知識

を深めることができた。その他にも、ロレーヌ大学教育学部2年生の教育方法に関する授業に参加し、都留文科大学での学びについて紹介する発表を、学生たちとともにいった。フランス側からもロレーヌ大学教育学部の学びの日常について、学生から発表が行われた。フランスには、実はゼミに所属して皆で学びながら論文を書くという制度が、大学院にはあるが学部には存在しないため、日本の学部のゼミの制度や実態について質問が集中したことは興味深かった。

ヴァンスでは、無事に市内のフレネ学校で二日間の見学を行うことができた。1日目には、午前中に子どもたちが各自で立てた学習計画表をもとに国語と算数の個別自由進度学習を行う様子や、午後のアトリエの時間に、絵の具等が常備されている専用の美術アトリエの部屋で子どもたちが自由に絵を描く様子などを見学した。さらにこの日は、元幼稚園クラスの担任ミレイユ・ルナール先生が私たちのために学校に来てくださり、ご自身の現役時代の経験等、教員の立場からのお話を伺うことができたことも大変有難かった。2日目には、校庭にあるテートル広場での幼稚園生・小学生の全校生徒による全体会議の様子も見ることもできた。幼稚園から小学校高学年までの子どもたちが、彼ら自身で司会・運営を行い、学校生活の中で起こった問題について率直に批判したり話し合ったりすることは、日本だけではなくフランスでも中々ないものであり、こうした場に実際に生で居合わせることができたことは、大変貴重な体験であった。特に、学習障害を持つ5年生の生徒に、同級生が「こちらと一緒に遊ぼうと誘ってもいつも断ってくる。無理にとは言わないが、たまには皆で遊ぶように努力して欲しい。」と、彼のことを考えて率直に批判をする場面が印象的であった。批判という行為を、日本のようにネガティブな意味の「非難・否定」と混同せず、相手の成長を真に願ってポジティブに意見やアドバイスを行うという形で、小さな頃からこうした公の場で皆の前で自然と実践できることは、子どもの公共性や自己表現・コミュニケーションの能力の発達にとって、とても大事なことであると感じた。

今回の経験を生かし、来年以降は正式な研修旅行として大学に認めて頂けるよう、企画をさらに練って行きたいと思う。帰国した学生たちに改めて報告書を書いてもらったが、それぞれに異文化における教育への新しい発見や学び、また深い交流ができたようであった。ちなみに瓦林のゼミからは4名が参加したが、各自がフランスでの経験を元に日仏の教育についてかなり深い考察をした論文を完成させたのち、現在は全員が教育現場にたち、初任者教員とはいえ、フレネの自由作文の実践を始めたり、子ども中心の教育を日本で少しずつでも行おうと奮闘している。先日はその4名が、後輩の現ゼミ生に対し、Zoomを通して実践報告もしてくれた。その成長した姿に頼もしさを感じるとともに、外国の教育や文化を生で体験できる研修旅行の影響の大きさを、改めて実感した。この研修の実現にあたり、フランスのゴ先生・プロ先生と、支えて頂いた学内の方々に心より感謝申し上げたい。

<2020年度>

コロナ感染拡大により、国際的な往来を必要とする研究が実施不可能となったため、当初計画していたクリスチャン・ギャラン仏トゥールーズ大学教授の招聘は、残念ながら実現できなかった。しかし、コロナ禍ならではの研究交流も実現できた。ギャラン教授が、2021年2月以降計3回に渡り、Zoomを通じた日仏の教育比較研究に関する研究会を計画され、そのうち2021年4月に行われた第2回の研究会に日本から参加することができた。内容は、福音館書店から刊行されている子ども向けの雑誌「こどものとも」についての考察であった。私自身もフランスで提出した博士論文でも触れた部分であるが、日本は大正時代に出された「赤い鳥」に始まり、子ども向けの雑誌や文化の成立が、世界的に見ても

傑出しているのが特徴である。フランスのような子どもよりも大人が文化の主役であるという概念とは違い、日本は子どもによる文化を非常に大事にしていることが特徴であり、その伝統が今も引き継がれているのではないかと、という発表内容であった。来年度はさらにこのようなオンライン研究会を開く機会を増やしたいとギャラン教授もお話されており、ぜひ積極的に参加したいと思う。さらには、コロナの感染状況次第ではあるが、2021 年度中には、可能ならばギャラン教授を都留にお招きし、研究交流を行いたいと考えている。

7. 研究の実績（論文・発表 等）

<2019 年度>

- * [発表]「オランダのフレネ学校を訪問して」、8/4 日本フレネ教育研究会夏の全国集会(東京)にて報告
- * [発表]「オランダのフレネ式小学校、フランスのフレネ式中学校・高校における教育実践について」、8/11 日本生活教育連盟 夏の全国集会(愛知)にて報告
- * [論文]「日仏の高等学校における教育課程改革」、『フランス教育学会紀要第 31 号』フランス教育学会、67-74 頁(8 頁)、2019 年 09 月
- * [論文]Henri Louis GO, Akiko KAWARABAYASHI(アンリ＝ルイ・ゴ、瓦林亜希子)、La valeur de bienveillance en éducation. Une coopération France-Japon en “Pédagogie Freinet” (教育における「子どもをありのままに受け入れる」ことの意義—フレネ教育における日仏間の協働的实践 2)、『Les valeurs en éducation Transmission, conservation, novation [Laboratoire LISEC -Université de Lorraine](仏ロレーヌ大学 LISEC 研究所紀要—“教育における価値体系：発信と受信、そして革新”) 2019-2020』、pp.105-114、2020 年 1 月

<2020 年度>

- * 10/10 に行われた、民主教育研究所主催：コロナ・パンデミックフォーラム第 3 回国際教育研究委員会企画研究会「世界の子どもと教師」において、委員として企画・運営を担当
- * 第3回 フレネ教育研究会 入門講座 にて下記の内容で発表
 - 日時:2020 年 10 月 17 日(土) 15:00 - 17:00
 - 定員:50 名 オンライン開催
 - 内容:<3>発展編 講師:瓦林亜希子(都留文科大学)
- 「ヨーロッパにおけるフレネ教育の特異性 ～自然観、カリキュラム、教育運動の観点から」
(参照 <https://peatix.com/event/1649385?lang=ja>)
- * フレネ教育研究会 全国オンライン研究集会(日時:2021 年 2 月 21 日(日) 10:00 - 16:20)の全体講演「マリオ・ローディの仕事に学ぶ—イタリアのフレネ教育から考える」(発表者:大阪市立大学/鈴木伸尚氏)のコメントを担当
- * 論文「子どもの声に耳を傾け、待つことの大切さ—「できない」の裏にある「やりたい」を見抜き支援する」(雑誌『生活教育』no.860 : 2021 年 4/5 月号:2021 年 3 月 23 日発売号に掲載)